

教区だより

2021
11月

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌 第380号

新型コロナウイルスの猛威が世界中を不安に陥れ、私たちの日本社会も計り知れない不安の只中にあります。これまで「当たり前」にしていたことが当たり前ではなくなった現実に直面し、あらためて考えさせられること、気づかされることも多々あるのではないかと思います。私たちが当たり前にしてきた「日常」とは、実はどこにも約束されていない奇跡の連続であり、また人間の自我分別が思い描く理想は、常に事実の前に屈服せざるを得ないという道理も教えられます。いま、私たちは早期の事態終息を深く願いながらも、このよくな時だからこそ、浄土真実を宗とする宗祖親鸞聖人の教えに身ををさらし、聖人の教えに出会い直していくことが大切ではないかと思えます。



自分の幸せだけを求める それは流転

※毎月掲載しております「ことば」は、教区駐在教導が担当しています。

目次

1頁 「ことば」

2頁 **連載** 悲しみが通じあう時 ―愚禿悲歎述懐を通して―

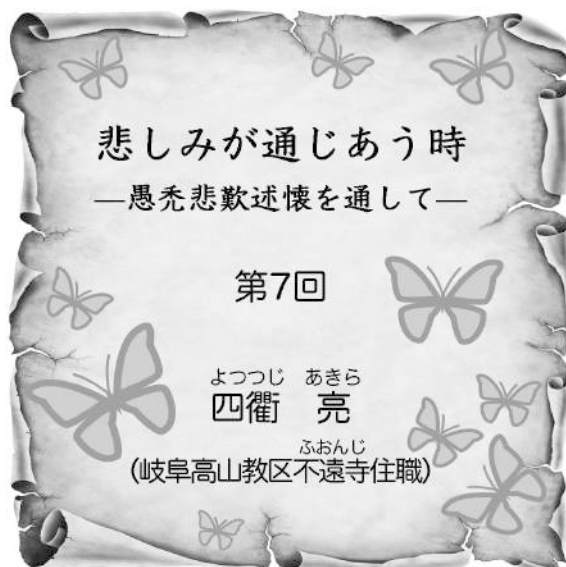
《第7回》 よつつし 四衢 あきら 亮氏

3頁 「今、この時に、親鸞聖人に会う」 さかど 沙加戸 たかし 崇氏

4頁 教務所からのお知らせ

京都教区教化体制図

教区教化委員会・教化推進本部 発足式開催



蛇蝎(じやかつかんさ) 奸詐(けんさ)のころろにて

自力(じりき)修善(しゆぜん)はかなうまじ

如来(にょらい)の回向(えこう)をたのまでは

無慚(むざん)無愧(むけい)にてはてぞせん (聖典五〇九頁)

蛇蝎、「へび」や「さそり」は毒を持っているもので、恐れ憎み嫌うものの譬えに使われる言葉です。その憎み嫌うものが、自分の外にあるのではなく、「ころろ」として自分の中にあると言われるのです。それは奸詐の心。奸はよこしまで乱す心、詐はいつわり欺く心です。ずる賢く、自分さえも騙す私たちのはからいの心が奸詐です。私たちのそのずるさを教えられたことがあります

した。秋は運動会の季節です。ただ最近、6月に運動会をされるころもありますし、新型コロナウイルス感染の中、随分様変わりして、無観客で家庭にはオンラインで映像が配信される形もあります。

それでも運動会でいつも思い出すのは、お寺の子ども会に来てくれていたT君のことです。通っていた保育園の運動会の次の日が、子ども会でした。T君に「運動会終わった？」と声をかけると、「うん、昨日で終わった！」と元気に応えてくれました。その応えの言葉に、思わず笑ってしまいました。「昨日で」という「で」のところにT君の心が込められているのです。

「昨日終わった」と言わず、「昨日で」と言ったのは、T君にとって、夏前から毎日のように、体操や踊りを覚え、繰り返し練習し準備をしてきた、長い長い運動会が、昨日でようやく終わったということなのです。毎日が運動会、真剣で精いっぱい運動会だったのです。今日は練習だから、これは稽古だから、まだまだ準備段階と、手を抜いたり、気を抜いたり、ズルをしたり真剣さを欠くのは、おとなの計算なのでしょう。それは必要な知恵なのかもしれませんが、それが生きることに全体の姿勢になり、全て練習や稽古や準備のつもりで、自身の人生の事実として受けとめず、

どこか他人事にしてしまうことになっているのかもしれませんが。

今、コロナ感染を防ぐために、いろんな行事や仏事が省略されたり簡略化されたりしています。それは致し方ないことですが、生きることや人生が簡略化されたり省略されるわけではないでしょう。毎日毎日、一つ一つが私の人生です。そこに自身の問題や生きる姿勢を問うことまで省略するならば、コロナにかこつたずるい計算ではないでしょうか。

能力や経済力や努力することを修善の前提にして、できない者やできなくなった者は置き去りにすることも厭わず、そんな高みにある仏を目指し、その到達を他人と比べたり、認めてもらおうと目立つ時には張り切り、人が見ていなければ手を抜いたりする計算する心を頼みとし、その自分の力と自分のまじめさに自己満足する修善の歩みは、とても仏意にかなうものではないでしょう。そのことをどこまでも漏らさず明らかにする如来の教えに出遇うことがないならば、自分さえも騙す自身のずるさを知らないまま終わるところであつたと、如来の功德を讀んでおられます。

「今、この時に、親鸞聖人に遇つ」



「教区教化は教区人の手で」

京都教区近江第1組響意寺 沙加戸崇

九月の末に緊急事態宣言が解除されました。一年半余り続くこの新型コロナウイルス感染症は、多大な影響を及ぼしました。我々の関係性を寸断し、生活基盤を壊しています。それにより、大切な「かたち」が壊れています。

これから、まさに報恩講シーズンをお迎えします。昨年から自坊では報恩講の「かたち」が大きく変わりました。お荘厳はそのままですが、勤行はできるだけ短くなるように正信偈、同朋奉讃のみ。ご法話を一席ずつ四座のお勤めをしますが、何より報恩講組内の相互の参勤は無くなっています。本当に、「らしくない」報恩講を勤めざるを得ない状況です。近隣のお寺でも、みんなで作る御斎おみいがなくなったり、ご法話が無かったり、ご門徒の参拝を中止したり、法要自体を取りやめたりそれぞれ工夫しながらも難しい状況が続いています。

「かたち」は大きく崩れています。

私たちのお寺は、「かたち」を踏襲することで大切なことを相続してきたことは言うまでもありません。ご本尊の前に身を据えて、その名みなを称えてきました。初めから、名を大切だと了解していたわけではなく、意味もわからず、むしろ声に出さなくても心の中で大切にすればいいだろうとか、声に出して高らかに念仏する人に眉をひそめたりしてきたのではないのでしょうか。私も恥ずかしいとか、白々しいと言う感覚が初め色濃くありましたし、念仏を称えることがしつくりきいているというような感覚はあまり感じません。

しかし「かたち」を守っている場に身を置き続けることで、名を称える人にまず出遇い、その人々から大切な言葉を頂いたり、教えられたことはたくさんあります。本当に多くの言葉を頂いてきたのです。それがお寺であり、私にとって教区や地区の学びの場でした。

私は今から二十年前に学校の教員を辞めて、自坊の仕事をするようになりました。その頃は、少し時間的な余裕があり、周りからのお誘いにより教区教化委員会の仕事に関わり始めました。ただその当時は、教区教化に対して自覚もなければ何の関心もありませんでした。正直に言えば、お手伝いしてあげるとか、ボランティアぐらいの感覚で教化活動に関わっていたのだと思います。当然、その心構えは態度に現れていたのだと思います。当時の教区駐在教導の方から厳しく指導されたことはあまり思い出したくない出来事です。本当に、自分の心得違いに

今でも脂汗が出てきます。静かな語り掛けでしたが、気持ちを押さえながら話された語り口は返って深い反省を促しました。「この場所を大切にしないさい」。みんなが大切な時間を削り出して作っているこの場を、いい加減な態度で壊すことは許されない。場を軽く見るな。そんなお言葉でした。

なぜ場を大切にしないといけないのか。みんなが大切にしているから。それもそうですが、なぜみんなが場を大切にしているのか。それは場という「かたち」に背景が備わっているからだと思います。本願と呼応する、私が生きているということの事実。悲しみ、悩み苦しむ事実が「かたち」の後ろにきちんと備わっていることが、場の重さ、「かたち」の大切さなのだと思います。

教区教化活動に関わりを持たせていただき、とんだ勘違いから始まりましたが、この場でお育ていただいたことは本当に得難い経験です。先輩や仲間には厳しい言葉や任職としてのアドバイスをいただき、また日々の歩みを熱く語っていただきました。何から何までお教えいただいたことです。

「教区教化は教区人の手で」。教区の人が多く関わっていただくことで、その場は活性化し大きな力になることは明らかです。今回新しく教化委員会教化推進本部がスタートしました。おそらく様々な問題も生じますが、新しいメンバーで新しい刺激をいただきながら、また大切な場を作っていくことができればと願っています。

教務所からのお知らせ

《得度》

二〇二二年十月七日付
 山城第一組 専光寺 中野 理香
 近江第九組 光行寺 関 得真

敬称略

《住職任命》

二〇二二年九月二十八日付
 山城第四組 萬因寺 村上 祐教
 近江第一組 善福寺 山本 顕教
 但馬組 教徳寺 瀬田 崇

敬称略

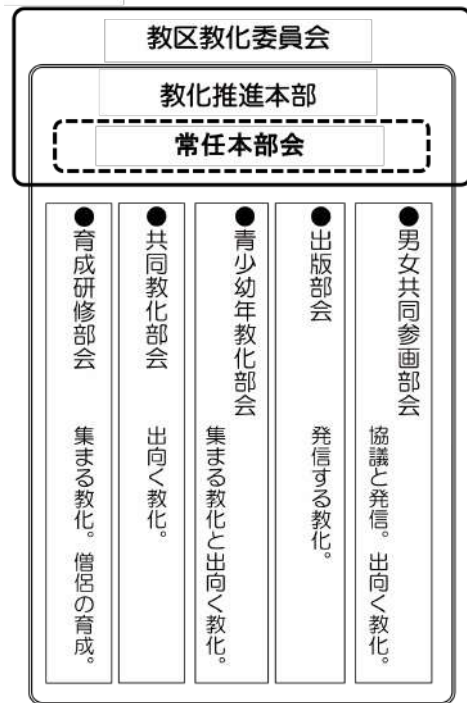
《敬弔》

ご生前のご功勞を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

山城第一組 憶念寺前坊守 野間 瑠璃子
 二〇二二年十月六日 八十七歳
 近江第一組 常徳寺前住職 笠沼 和雄
 二〇二二年九月十五日 九十二歳
 近江第九組 教宗寺前坊守 松澤 喜美子
 二〇二二年九月二十四日 九十八歳

敬称略

◆京都教区 新教化体制図



『京都 教区通信』70、74頁参照

教区の役割

出向く教化・集まる教化・発信する教化
 教区教化は↓地区↓組↓寺院のため

◆教区教化委員会・教化推進本部 発足式開催

9月29日、教区教化委員会・教化推進本部発足式がオンライン会議システム（Zoom）を利用し開催されました。楠信生教学研究所所長の講義を、京都教区YouTubeサイトにて配信しています。ぜひご視聴ください。



講題「浄土真宗の教化とは」楠 信生 氏

編集後記 the editor's note

このたび、教区教化委員会・教化推進本部発足式が、初めて開催されました。ご自坊のある北海道教区の教化を大切に歩んでこられた楠先生のお話を、教区教化に関わる者として、背中を押していただく思いで聴聞しました。YouTubeを用いて、ぜひ教区内で共有したいと思いますが、次号にて、今回の発足式全体のレポートを予定しております。どうぞご期待ください。

また、日程の最後に、翌日に退職を控えた谷本駐在教導の挨拶がありました。前号の『教区だより』に書いてくださったように、「家庭やお寺、組や教区という現場で、悩みながら仏法に生きることにあがき続け」、「お寺を聞法の道場として開き続けることに力を尽く」せと、どこまでも深く願いかけられている我が身を、あらためて教えられました。

谷本さんをとおして私にまで伝わった熱の本源を、教化の現場のなかで、たずね続けたいと思います。

(出版部会 比叡谷真)

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌

『教区だより』 第380号

発行人 日野 隆文(真宗大谷派京都教務所長)

発行所 真宗大谷派京都教務所

〒600-8164 京都市下京区花屋町通烏丸西入

Tel : 075(351)5260 Fax : 075(351)5256

発行日 2021 (令和3) 年11月1日

メールアドレス : kyoto@higashihonganji.or.jp

真宗大谷派京都教区ホームページ

京都教務所

検索

